

陰嚢内 sclerosing lipogranuloma の1例

国立別府病院泌尿器科 (医長: 岩川愛一郎)

岩川愛一郎, 濱野克彦*

INTRASCROTAL SCLEROSING LIPOGRANULOMA:
A CASE REPORT

Aiichiro IWAKAWA and Katsuhiko HAMANO

From the Department of Urology, National Beppu Hospital

We report a case of genital sclerosing lipogranuloma, which lacks any causative agents or episode of genital trauma. The patient was a single male of 27 years old. Open biopsy revealed it lipogranuloma with no evidence of malignancy. Cut surface of the removed mass was solid and greyish white. The histopathological diagnosis was sclerosing lipogranuloma. The remnant of the mass disappeared after the treatment with an anti-inflammatory agent. No recurrence has occurred for 1 year and 10 months.

(Acta Urol. Jpn. 35: 357-359, 1989)

Key words: Sclerosing lipogranuloma, Scrotum, Open biopsy

緒 言

陰嚢に発生する sclerosing lipogranuloma は、稀なものであるが、われわれは、外傷あるいは異物注入などの既往なく陰嚢内に発生し、特異な形状を呈した sclerosing lipogranuloma の1例を経験したので報告する。

症 例

患者: 27歳, 男性, 未婚

主訴: 陰茎根部腫瘍

初診: 1986年4月15日

職業: 建設業

既往歴: 2年前に淋菌性尿道炎

現病歴: 初診の10日位前に陰茎根部に異和感を覚え、触れてしこりに気づいた。また、下着をつけるとき陰茎が腹側に曲がりにくくなってきたことに気づき当科を受診した。

現症: 身長 162 cm, 体重 61 kg, 血圧 138/78 mm Hg, 脈拍 72/分で整。栄養良好。陰茎勃起および射精は可能で排尿障害もなかった。腫瘍は、Fig. 1のごとく、陰茎根部を取り巻き、一部は陰嚢縫線皮下に連

続しており、弾性硬、表面不整、可動性で軽度の圧痛を伴っていた。睾丸・副睾丸・精索ならびに前立腺には触診上異常はなかった。表在性リンパ節腫大はなかった。悪性腫瘍を疑い、4月16日入院となった。

入院時検査成績: 血液像および血液化学所見に異常はなく、血沈 4 mm (1時間), CRP + であった。尿所見正常。X線学的検査; 胸腹部単純写真, 尿道造影, IVP には異常所見を認めなかった。腹部・骨盤部超音波および CT 検査では、転移巣らしきものはなく、リンパ節腫大もなかった。Ga シンチでも陰部および骨盤部に異常集積は認められなかった。

開放生検: 確定診断を得て手術方法を決定するため局麻下開放生検を行った。病理診断は lipogranuloma であり malignancy の所見はないとのことであった。

以上より、良性の腫瘍と判断し、腫瘍のみ摘出する方針とした。

手術所見: 腫瘍直上の陰嚢皮膚に円弧状切開を加えた。剥離はやや困難であった。陰茎皮膚知覚障害の合併症を懸念して、陰茎背側の腫瘍は残したまま手術を終了した。Fig. 2 が摘出標本である。

病理組織学的所見: 腫瘍剖面は帯黄白色調、充実性、弾性硬であった。顕微鏡的には、Fig. 3のごとく、脂肪壊死の周囲に多数の多核巨細胞、リンパ球、好酸球浸潤と線維化を伴う脂肪肉芽腫の像であり、

*現: 三信会原病院

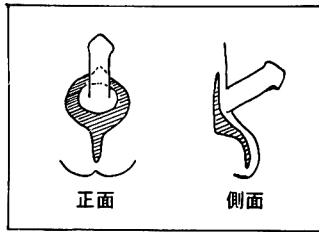


Fig. 1. Location of the mass in the genitalia

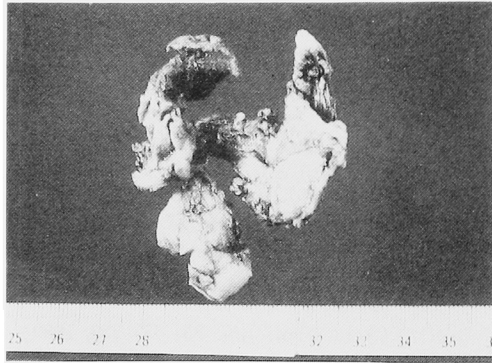


Fig. 2. Gross appearance of removed mass.

sclerosing lipogranuloma の診断であった。この所見は、生検所見とはほぼ同様であった。

術後経過：術後、消炎鎮痛剤を2週間投与した。術後4ヵ月経過して再来したとき、取り残した腫瘍は消失していた。約1年10ヵ月後の現在、再発は認められ

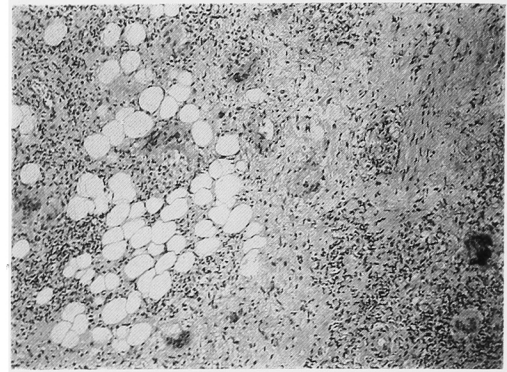


Fig. 3. Microscopic findings of sclerosing lipogranuloma. H & E, reduced from 200.

ない。

考 察

種々の外傷後に、皮下脂肪織に発生する肉芽腫性反応に対し、1950年、Smetana ら¹⁾により sclerosing lipogranuloma の名称が提唱され、陰部腫瘍9症例を報告している。1977年 Oertel ら²⁾は、Smetana らの9例を含む23例の陰部 sclerosing lipogranuloma のうち21例の腫瘍内に paraffin を検出したとして、原因は外因性油脂によるとした。自験例では局所の外傷や異物注入の既往はなく、原因は明らかではなかった。このように、明らかな外因性原因がなく、男性陰部に発生し、組織学的所見および臨床像から本症と考

Table 1. Sclerosing lipogranulomas in Japan excluding foreign body granulomas

報告者 (年度)	年齢 (歳)	発生部位	臨床症状	病理組織診断	治療
1. 西 (1967)	54	外 陰 部	発 赤 腫 脹	非特異性炎症性肉芽腫	消炎療法
2. 石塚他(1980)	36	陰囊内中央	無痛性腫瘍	炎症性肉芽腫	腫瘍摘除
3. 高橋他(1980)	43	"	"	Sclerosing lipogranuloma	"
4. 高橋他(1980)	37	"	"	"	"
5. 稲積他(1980)	45	陰囊内左側	"	lipogranuloma	高位除率術
6. 堀井他(1983)	38	陰囊内中央	"	Sclerosing lipogranuloma	腫瘍摘除
7. 堀井他(1983)	33	"	"	"	"
8. 牧 (1984)	54	右鼠径部	"	"	高位除率術
9. 高橋他(1984)	32	陰囊内中央	"	"	消炎療法
10. 張 他(1985)	39	"	"	"	腫瘍摘除
11. 吉田他(1987)	39	"	腫瘍(硬結性)	Granulomatous Panniculitis	"
12. 富岡他(1987)	39	陰 囊 内	腫 瘍	Sclerosing lipogranuloma	"
13. 富岡他(1987)	36	"	"	"	"
14. 富岡他(1987)	50	"	"	"	生 検
15. 富岡他(1987)	30	"	"	"	腫瘍摘除
16. 富岡他(1987)	40	"	"	"	"
17. 自験例	27	"	無痛性腫瘍	"	"

えられるものは、本邦文献上16例報告されているのみで、比較的稀な疾患と考えられる。

自験例を含めた17例の臨床像、病理組織診断、治療法の概略は Table 1³⁻¹²⁾ のごとくである。年齢は27～54歳(平均40歳)で、全例陰囊内または鼠径部に無痛性腫瘍を認めている。自験例は、富岡ら¹²⁾の症例5と類似しており、陰茎根部皮下を輪状に取り巻きかつ、陰囊縫線皮下にのびていた。

治療法は、悪性腫瘍(liposarcomaなどの軟部腫瘍)との鑑別が困難なので高位除臍術などが行われている例もあるが、自験例では、術前開放生検にて確定診断後に腫瘍摘除を行った。また、高橋ら⁹⁾、富岡ら¹²⁾の報告にみられるように、本症では、消炎療法で消失することもあり、自験例でも、取り残した腫瘍は消炎剤投与で消失しており、今後は sclerosing lipogranuloma の診断がつけば、手術をせずに消炎剤投与のみで経過をみるのも一方法と考えられる。

鑑別すべき疾患として、陰囊内良性腫瘍(例えば adenomatoid tumor)、悪性腫瘍(例えば liposarcoma)、炎症性変化などが考えられるが、sclerosing lipogranuloma では、比較的形態に特徴があるので、術前に生検を行うことにより、過度の手術を避けることができると思われる。

なお、本症の成因については、吉田ら¹¹⁾が詳細に考察しており、また、病理組織像については Smetana ら¹⁾の論文に詳細に述べられているので割愛した。

結 語

外傷あるいは異物注入などの特別な原因なく陰囊内に発生した sclerosing lipogranuloma の1例を報告した。生検にて確診後、腫瘍摘除を行い一部取り残

したが、消炎剤のみで消失し再発はない。

文 献

- 1) Smetana HF and Bernhard W: Sclerosing lipogranuloma. Arch Pathol 50: 296-325, 1950
- 2) Oertel YC and Johnson FB: Sclerosing lipogranuloma of male genitalia. Arch Pathol Lab Med 101: 321-326, 1977
- 3) 西 守哉: 外陰部癌をうたがわれた非特異性炎症の症例. 日泌尿会誌 58: 1092-1093, 1967
- 4) 石塚栄一, 藤井 浩, 岩崎 皓, 佐々木佳郎: 悪性腫瘍を思わせた陰囊内の肉芽腫. 日赤医 32: 68, 1980
- 5) 高橋陽一, 飛田収一, 山内民男, 真田俊吾, 佐々木正道: 陰囊内 sclerosing lipogranuloma の2例. 日泌尿会誌 71: 430, 1980
- 6) 稲積秀一, 鈴木唯司: 左陰囊内脂肪肉芽腫の1例. 日泌尿会誌 74: 1111, 1980
- 7) 堀井泰樹, 松田公志, 飛田収一, 高橋陽一: 特異な形態を呈した陰囊内硬化性脂肪肉芽腫の2例. 日泌尿会誌 71: 1482, 1983
- 8) 牧 昭夫, 田島政晴, 中山孝一, 松島正浩, 安藤弘, 跡部俊彦: 精索に発生した primary lipogranuloma の1例. 泌尿紀要 30: 371, 1984
- 9) 高橋陽一, 松田公志, 堀井泰樹, 大森孝平, 飛田収一, 前田義雄: 特異な形状を呈する陰囊内硬化性脂肪肉芽腫の5例. 日泌尿会誌 75: 1194, 1984
- 10) 張 邦光, 林 秀治, 竹内敏視, 兼松 稔, 坂義人, 西浦常雄, 下川邦泰: 陰囊内硬化性脂肪肉芽腫の1例. 日泌尿会誌 76: 1603, 1985
- 11) 吉田全範, 北村慎治, 藤永卓治: 陰囊内に発生した硬化性脂肪肉芽腫の1例. 泌尿紀要 33: 137-140, 1987
- 12) 富岡 進, 布施秀樹, 脇坂正美, 島崎 淳, 松寄理: 陰囊内硬化性脂肪肉芽腫の5例. 臨泌 41: 911-914, 1987

(1988年3月2日受付)